

「日本における鍼灸治療 鍼灸の歴史」

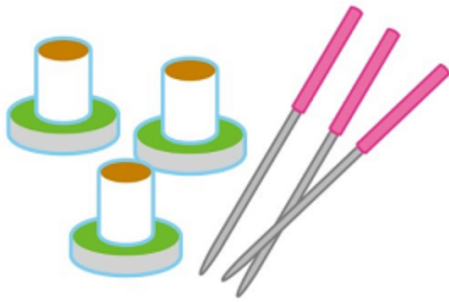
附属東洋医学研究所

助教 津嶋伸彦

教えて！！漢方&鍼灸



『鍼灸の歴史』



今回は鍼灸の起源についてと古代中国のお話をしました。今回は日本での鍼灸の歴史についてです。

鍼灸は飛鳥時代に朝鮮半島を介して伝来し、奈良時代には「大宝律令」において湯液（漢方薬治療）などと同時に日本の医療のひとつに定められました。特に灸は平安時代に医療職を兼ねていた僧侶によって貴族社会で常用され、鎌倉時代にはお寺の施灸で一般に普及しました。

安土桃山時代になると鍼を小槌で叩いて刺激する日本独自の「打鍼（だしん）法」や、江戸時代には管の内腔に鍼を入れ、針柄（しんぺい）を指でたいて皮膚に刺入する「管鍼（かんしん）法」が開発されました。いずれも鍼の痛みを軽減するような配慮、工夫がなされています。

江戸時代、灸は庶民にとっての健康維持療法として親しまれていました。1810年に八隅蘆庵（やすみろあん）の著した『旅行用心集』には、山中でキツネやタヌキが近づかない方法や船に酔った時の対処法などの他に、足がくたびれた時に灸をする部位（足三里、通谷、承山）が描かれています。現代語訳も出版されていますのでご興味のある方はご覧いただけたらと思います。

明治時代に西洋医学が国の医学と定められ、鍼灸は非合法化されましたが、昭和時代に鍼灸復興運動が起こり、第2次世界大戦後、鍼灸が医業の一部（医業類似行為）として再び認められるようになりました。現在、鍼灸治療はアジアのみならずヨーロッパ、アメリカなど世界約60カ国で行われるようになっています。

ちなみに昭和初期に多くの著名人も施術され、鍼灸治療でご活躍された沢田健先生のお弟子さんである代田文誌先生のご子息の代田文彦先生は、附属東洋医学研究所の初代所長でいらっしゃいます。

以上、鍼灸の歴史について述べてまいりました。鍼灸施術にご興味のある方は、一度、当院鍼灸臨床施設をお訪ねください。



八隅蘆庵(やすみろあん)

文化7年/1810年

1冊

和歌山市湊本町3-2

和歌山市立博物館

江戸時代の旅行マニュアル。山中でキツネやタヌキが近づかない方法や船に酔った時の対処法などが具体的に記されている。この画面では、足がくたびれた時に灸をする部位を描いている(足三里、通谷、承山)。

(文化遺産オンライン(文化庁)より改変)

次回は「保険診療の漢方薬、市販の漢方薬、自費診療の漢方薬、何が違うの？」についてお話します。